

かも入門書として適当なものの例えは「カカラ語における W. Krause und W. Thomas: Tocharisches Elementarbuch, Heidelberg 1960」のような規模で書かれた参考書が現われるならば、語学者のみならず仏教学者によるコータン語研究は、さらに活潑となる、急速に進歩するものと信じる。これをどうインレイ教授に求めるので、既に睡を得て復讐を望むものか。

註一 サカ語全般に關つては、H. W. Bailey: *Languages of the Saka. Hb. der Orientalistik. I. Abt. 4. Bd. Iranistik, I. Abschnitt: Linguistik* (1958), p. 131-154 が、最好の概説書である。

註二 特々 H. W. Bailey: *Codices Khotanenses. Copenhagen 1938; Saka Documents i and ii (= Corpus inscriptionum iranicozum ii)*. Cf. K. T. ii, p. vi; iv, p. vii; v, p. x, n. 1.

(H. W. Bailey: *Indo-Scythian Studies being Khotanese Texts, I-V, Cambridge, 1945-1963*)

アーレフ・イクリギニル著

ナスレッディン＝ホジャの機智の

ブリズムを通して来る光《物語の教訓》

その生涯、逸話に關する思想的・哲學的一研究

護 雅 夫

東洋文庫には、いわゆる「ナスレッディン＝ホジャ物語」の版本が十種類所蔵されている。そのうち主要な七種類を、出版年の順に列挙する。この如くである。

(1) Sami Ergun: *Manzum Nasreddin Hoca Fıkra ve Hikâveleri. Bir renkli Tablo, 38 Resim ve 150 Fıkra* (Ankara, 1950). (サミシ＝エルグン「韻文による、ナスレッディン＝ホジャの逸話・物語集——原色図版一葉、插图三入葉、一五〇語——」)。

(2) Ercüment Ekrem Talu: *Büyük Nasreddin Hoca* (İstanbul, 1954). (エルクメンタル＝エクレム・タル「偉大なナスレッディン＝ホジャ」)。

(3) Ragıp Şevki Yegim: *Dünyayı güldüren Adam. Bü-tün Fıkralarile Nasrettin Hoca'nın Hayatının Romant* (Ankara, 1956). (ラギプ＝シェウキ＝イェギム「世界を笑わせる人物。ナスレッディン＝ホジャの全逸話と示したその伝記小説」)。

(4) Eflâkım Cem Güney: *Nasrettin Hoca Fıkraları* (İstanbul, 1957). (エフラークン・タムン＝ジヤム＝ギネネ「ナスレッディン＝ホジャ逸話集」)。

(5) Mehmet Ali Aksoy: *Nasreddin Hoca ve Hikâveleri* (İstanbul, 1957). (メフメト＝アリ＝アクソイ「ナスレッディン＝ホジャの物語集」)。

(6) A. Refik Gür: *Nasreddin Hoca'nın Nükte Menşu-*

rundan Isiklar. 《Kissadan Hise》. Hayati, Fikralari izerine fkrî, felsefî bir inceleme (İstanbul, 1959).
(アールレフィクllギュル「ナスレッディンllホジャの機智のプリズムを通して来る光《物語の教訓》。その生涯、逸話に關する思想的・哲學的一研究」)。

(7) Abdülhakî Gölpinarlı: Naredin Hoca (İstanbul, 1961). (アブデュルバーキllギョルプナルル「ナスレッディンllホジャ」)。

私は本稿で、これらのうち、(6)ギュル本を紹介しようと思うのであるが、その前に、これを除く他の六種について簡単にのべておく。すなわち、この六種の版本を一つ一つ検討した結果、私は、ほぼつぎのように言えると思う。

まず、(2)タル本(三七五話)と(7)ギョルプナルル本(二九五話)とは、ナスレッディンllホジャ物語の比較的古い形式・内容・語法を伝え、大部分のものは、文体が簡潔で達意、一つ一つの話も一般的に非常に短いが、中には、理解にやや困難なものもなくはない。(1)エルグン本は、その題名からも知れるように一五〇話を、韻文の形に書き換えたもので、内容はともかく、形式・語法・文体は相当変わつてしまつてゐる。(5)アクソイ本(四四五話)は、著者が若い世代のために書き改めたもののようで、文体は平易であるが、わかり易くするため、ことさら説明的な文句が挿入され、一般に長くて冗長である。(4)ギュネイ本(二五二話)にも、(5)アクソイ本と同じく、著者の手が相当加えられているが、その文体は、

徒らに修飾的であつて、我々には、却つて理解し難くなつてゐる。
(3)イエシム本は、各々の話をつなぎ合わせて創作した、ナスレッディンllホジャの伝記小説である。

さて、(6)ギュル本であるが、これは、一口にいうと、その題名からも推察されるように、ナスレッディンllホジャ物語の一つ一つを、単に「滑稽・頓智ばなし、奇行録」として取り扱うのではなく、それらに「思想的・哲學的」説明を加え、そこから何らかの「教訓」、「処世訓」を引き出すことを目的としている。

著者は序文(一一五頁)で、まずこのことを明らかにし、ついで、「我がホジャについて」という一章を設けて(六一—一八頁)、そこで、ナスレッディンllホジャの伝記、肖像そのほかについて論じてゐる。ホジャの伝記に関しては、私はかつて、それについてトルコで出されている諸説を紹介したことがあるので、詳しくはそれに譲り、ここで、極めて簡単に要約しておく、つぎの通りである。

(一) 一四世紀の後半から一五世紀の初頭にかけて、つまり、ティムール(一三六九—一四〇五在位)、バリエズイト一世(一三八九—一四〇二在位)と同時代人とするもの。

これは、一七世紀のトルコ人旅行家、エヴリヤリィチェレビの記述に基いているが、今日では、この説は、學問的には否定されている。

(二) 一三世紀の人物とするもの。

(a) ヘジャラ暦六〇五年(西暦一二二八)に生まれ、六八三年(一二三八)に歿したとする、ハサンllエフエンディ、ファトリィキョプルの説、
(b) ヘジャラ暦六八二年(西暦一二三三)から六九〇年(一二三九)にかけてコン

ヤに住み、七〇〇年(一三〇〇)以後、余り遠くない時期に死んだとする、イスマイルハミッドニシユメンドの説。

(c) 一三世紀のはじめからその後半にかけての人物であるとする、イブラヒムハックコンヤルの説。

はじめに列挙した諸版本の著者のうち、(1)エルグンは(c)コンヤル説を、(2)タルは(b)ダニシユメンド説を、それぞれ支持しているが、いま問題にしている(6)ギュルは、(3)イエシム、(4)ギユネイ、(5)アクソイ、(7)ギョルプナルとともに、(a)ハサンIIエフエンディ、キョブルル説に賛意を表している。ついでギュルは、トルコの女流文学者ハリデIIエディプIIアドゥアルの文章を引用し、要するに、彼女のいうように「ナスレッディンIIホジャの眼によつて、此の世を見ること」、つまり、ホジャの逸話から「教訓」を引き出し、それを「処世訓」とすることこそ、ホジャ物語を読む正しい態度であるとのべて、「我がホジャについて」と題する一文を終つてゐる。

本文には、六二話を収載しているが、それらは何れも、形式・内容・語法・文体ともに、上述の(2)タル本、(7)ギョルプナル本におけると殆んど異らない。つまり、これらは、ホジャ物語の比較的古い性格を保存している。

では、この書の特徴は、何処にあるか。それはいうまでもない。いままで簡単に紹介してきたことからわかるように、それぞれの話のあとに「思想的・哲学的」註釈をつけ、それらをすべて「教訓」として説明している点にある。ただ四例をあげると以下の如くであ

る。

その上、どう欺されたいてえんじやい？ (3)

ホジャが幼なとき、滅法意地つ張りの子供がおつて「俺あ、誰にも欺されん！」と言い張つてたげな。ナスレッディンは、この言葉を何度か聞いて、或る日、とうとう怒つたげな。「手前あ、ちよつと此処で待つとれ。儂やちよいとそこに用がある。いまに欺してやるから、見てろ」と言つて、去つてしまふ。子供は、何刻も待たが、ホジャがいつかな見えんので、腹を立て、ブツカ言ひ出したげな。その友だちがこれを見て「こんな遅うに、何を待つとるんじやい？」と訊いたげな。ことの経緯しんぎを話したげな。友だちは、この意地つ張りの阿呆さ加減を笑い笑い、言つたげな。「この呆けアホなす！ そう言つて欺しよつたんじや。その上、どう欺されたいてえんじやい？」

ギュルはこの話のあとに、つぎのような説明を加えている。

意地つ張りは「我独り尊し」という態度である。「我独り尊し」とするものは、えてして誤りに陥り易い。何となれば、そういう連中は、感情にばかり頼つていて、その絶好の**かも**になるからである。

感情が支配しているところでは——健全な感情を除けば——、理性の役割は第二義的になつてしまふ。したがつて、自分が強くて正しいと信じこんでいるものは、理性・知性を持つものに對しては、常に、脆くも敗れ去る。つまり、この話は、知性および理性が、一般に、感情の楯を用いる意地つ張りの「我独り尊し」とする態度に勝つことを示している(一二頁)。

イエス様は何を飲み食いしとられる？

ホジャが、托鉢のため、或る町へ行つて、寺院で法話を始める。じやが、毎夕、ホジャに食事を持つて来るものは誰も居らん。数日たつて、法話のなかで、イエスが天の第四層に昇天したことを話す。寺院から出ようとすると、一人の男が寄つてきて、「ホジャどん。イエス様は、天の第四層におられるというお話じやつた。じやあ、イエス様はそこで、何を飲み食いしとられるんじやい？」と訊く。ホジャは、カンカンに怒つて、こう答える。「おい、お前さん。儂や、此処へ来て、もう十五日にもなる。そのうちたつた一日でも、手前らの中で、『あのホジャどんは何を飲み食いしとられるんじやろ？』と訊いたもんがあるかい？」なのに今、儂に、天の第四層で、毎日、神の与えるいろいろの食いもので何不自由無う暮しとられる預言者が、何を飲み食いしとられる、なんてことを訊くたあ！ちつたあ考えて見い！」

この話に与えたギュルの説明は、以下の如くである。

この逸話では、「誰かの陥つている苦境をよく理解せず、それに便宜を与えぬ」態度がのべられ、こういう連中が、見事にしてやられることが示されている。我々は時として、まず第一に関心を持たねばならぬことはほうつておいて、不急不要の好奇心にとらわれ、その結果、このように、「参つた」と言わされることがある。「誰かの陥つている苦境を理解し、それに便宜を与えること」は、一社会人としての教養であり、道德感である（二五—二六頁）。

嘘じやと思ふなら、勘定えてみなされ。

批評と紹介 護

故ホジャの時代に、三人のキリスト教僧侶が旅に出たげな。ホジャの機智、頓智をかねがね耳にしたので、ホジャに会つて、問答しようと思つたげな。そこで、広場で宴会が開かれたげな。第一の僧侶が問う。「ホジャどん。世界の真中は何処じやな？」ホジャは、まごつく風も無う、杖で、驢馬の右前脚を指して、「そら、その脚の踏んでるところじや」と答える。僧侶が、「どうしてわかる？」と問い返すと、ホジャは、「嘘じやと思ふなら、測量つてみなされ。ピッターそうでなかつたら、そのとき言いなされ」と言う。僧侶は答えて窮して引き退る。第二の僧侶が進み出て、「空に輝く星の数はどれだけある？」と訊く。ホジャは、「儂が驢馬の身体からだの毛の数だけじや」と返事する。僧侶が、「それだけあると、どうして知れる？」と訊き返すと、ホジャは、「嘘じやと思ふなら、勘定えてみなされ。ピッターそうでなかつたら、そのとき文句つけなされ」と言う。僧侶が吃驚して、「ホジャ。驢馬の身体からだの毛が勘定えられるもんかい？」と言いつ返すと、ホジャは、「ならば、空に輝く星が勘定えられるもんかい？」とやり返す。この僧侶も、これにや何とも言へんで、引き退る。そこで第三の僧侶の番になる。恰かも我が智慧をひけらかすように勿体振つて、「これ、ホジャ。儂の鬚ひげは何本ある？」と尋ねる。ホジャは即座に、「儂が驢馬の尻尾しっぽの毛の数だけじや」と答える。僧侶が、「その証拠は何処にある？」と尋ね返すと、ホジャは、「いと易いこと。お前さんの鬚ひげを一本、驢馬の尻尾の毛を一本、と、一本づつ引き抜いて行きやあええ。ピッター合わなんだら、お前さんの勝ちじや」と返事する。僧侶は三人とも、ホジャの当意即

妙の返答、機智に、すっかり感心して、イスラーム教に改宗し、暫らく、ホジャのそばに滞在する。

これと同工異曲の話は、我國の一体禪師やきつちよもの頓智ばなし、佐々木政談のなかにも伝えられているが、ギュルはこれに、つぎのような説明をつけている。

ホジャはこの逸話のなかで、何ともうまく答えたものである。第一の僧侶が世界の真中を尋ねたのに対し、ホジャは、驢馬の右前脚——実はどの脚でも良いのである——の踏んでいるところを示したが、これは、世界が球形であることを考えるならば、全く正しい答えである。言うまでもなく、如何なるものでも球形の上の或る一点は、その真中であるからである。(中略)。今から七世紀も前に、このような機智に富んだ返答によつて、宇宙論的問題をのべたこと、つまり、世界が球形であることを主張したことは、ホジャの天才を示して余りある。第二、第三の僧侶の問いに与えた返事も、ホジャのユーモアに富んだ智慧を量るもつとも良い尺度、相手をアツと言わせて黙らせてしまうような機智・頓智を知る輝かしい例の一つである(二七—二九頁)。

お前に何の關係がある？

或るお喋りがホジャに、「いま、七面鳥詰め料理を一皿持つて、そこを歩きましたぜ」と言う。ホジャは、「それが僕に何の關係がある？」と答える。「どうやら、お前さんの家へ運んだらしいんじや」と言うと、ホジャは、「ならば、それがお前に何の關係がある？」と返事する。

この話を、ギュルはこう説明する。

不必要な好奇心を抑えることは、くだらぬ噂話をするものをやつつける一つの条件である。我々は、このように、他人に關することに干渉したり、誰かの個人的な問題に興味を抱いてはいけない。しかし、このことは、ただ、個人・家族に關する問題にだけあてはまる。社会・民族・國家の問題において、「僕に何の關係がある？ お前に何の關係がある？」と言つて、「我関せず焉」の態度をとるべきではない。我々は、個人・家族としてはそれぞれ別の人格・利害・關心を持つてはいるが、社会・民族・國家としては一体であつて、社会的・民族的・國家的問題、利害、關心はすべて我々自身のものであるから、これらに無關心であるわけにはゆかない。この「我関せず焉」の態度こそ、我々アジア諸民族の發展を阻止した原因の一つであつて、我々は常にこういう態度をとる連中と斷乎として闘うべきであり、これこそ、我々共同の民族的義務と考えねばならぬ(三二—三三頁)。

以上、私はただ四例をあげたに止まるが、ギュルは、その収録した六二話に、各々、このような説明・註釈をつけている。ギュルは、ホジャの出生地とされるアクシエヒル市で長年裁判官を務めた人のようであるが(序文三頁)、その態度、見解には、些か最肩のひき倒しの感がしないでもない。私がかつてのべたように、ホジャ物語が語り伝え言い継がれているうちに、それぞれ起源を異にする実に沢山の話が、ホジャの名のもとに集められ、その度に、形式や内

容を幾らか変えていつたとするならば、その多くの話のなから、ホジャという一人の人格を抜き出すことは、どだい無理な話である。しかも、それらすべての中から何らかの「教訓」、「処世訓」を引き出そうとすることは、こういう民譚を読む態度としてはむしろ邪道ではなからうか。

しかし、たとえそうであるにせよ、今日のトルコにおいて、ホジャ物語をこうした一種の「教訓譚」として受け取る風潮が非常に強いこともまた、否定すべからざる事実であつて、在日トルコ人の多くも、こういう態度をとっている。いま紹介したギュルの書物は、これを、つまり、トルコにおけるホジャ研究の一つの、しかし有力な傾向を示している点で興味深いといえるであらう。

註

- (1) これらのうち、(2)タル本、(5)アクソイ本については、拙稿「ナスレッディンⅡホジャ物語——ホジャとティムール——」(遊牧社会史探求第一四冊、一九六一年十月)、「ナスレッディンⅡホジャ物語」(史学雑誌七〇—一〇、一九六一年十月)で、また(7)ギョルプナル本に関しては、「ナスレッディンⅡホジャとその物語」(オリエント五—一、一九六二年三月)で、それぞれ、簡単に触れておいた。

- (2) 註(1)に引用した諸論文、および、拙稿「トルコにおけるナスレッディンⅡホジャ研究——とくにその生存年代について——」(文献サーヴェイ、未刊)。

- (3) 一々の話の標題は、ギュルの附したものである。

- (4) 以前、学院^{イェニセ}で学ぶものは、金銭・食糧を得るため、数ヶ月間、各地の村へ行つて、そこで、イマームやムエZZインの仕事をした。これがジェル(ceci)とよばれる。

- (5) そのほか、ナスレッディンⅡホジャ物語のなかには、我国で伝えられている滑稽・頓智ばなしと類似のものが幾つかある。私は、これら同工異曲の話の起源は、或いはインドに在るのではないか、と想像しているが、別に確証があるわけではない。

- (6) 註(1)、(2)で引用した諸論文。

—一九六四・四・三〇—

(A. Refik Gür: Nasreddin Hoca'nın Nükte Menşurundan Isklar. 《Kırsadan Hisse》 Hayati, Fikraları üzerine fıkri, felsefi, bir inceleme. Istanbul, 1959. 88p.)

トルコ歴史協会編

ベレテン 第二七卷第一〇七号

小山 皓 一 郎

「ベレテン(Belleten)」は、「トルコ歴史協会」(Türk Tarih Kurumu)の機関誌で、「トルコ共和国に於ける代表的史学雑誌として、同国歴史学界の研究動向を知るのに便宜である。一九三七年以来、年四回発行され、東洋文庫には創刊号からもなく購入されている。ここではその最近号の内容を論説の部に限つて、紹介する